

日本印人研究

— 山田寒山年譜稿 —

神野雄 二

一 序

印学は、印章や篆刻を対象として、これを科学的・総合的に研究する学問である。印章は古代メソポタミア文明に端を発し、東西文化圏に伝播し、欧亜大陸のほぼ全域に広まった。中国において印が使用され始めたのは戦国時代である。印章は七千年の歴史を有しており、他の文化や芸術などの諸領域との関連も深い。

日本の最も初期の印章は、隋唐時代印制の影響のもと所成された。時代が下るに従い、その形姿・印風に別趣の風格がみられるようになった。一七世紀以後、明朝崩壊後、中国から黄檗禪僧がわが国に渡来し篆刻を移植した。その後印学の学問の隆盛と相俟って多くの印人が活躍するようになる。一八世紀中ごろ、印聖と称される高芙蓉（一七二二—一七八四）が出現し、秦漢の古印への復古が提唱され、彼の門流一派により全国各地に伝播しゆくこととなった。明治期になると、芙蓉派による古体派とともに、小曾根乾堂や篠田芥津らの新傾向の篆刻家が登場する。また山田寒山や河井荃廬などが渡支・遊学し彼の地の篆刻を学んで帰国、新味溢れる作品を制作、大正・昭和の印壇が形成されることとなる。

さて、日本における印学の研究、印章や篆刻そして印人や印譜の、広い視野に立った体系的な研究はまだ十分なされていない。本研究は、日本の印章や篆刻の歴史的、文化史的な解明を目的としており、総括的には日本の印学の体系化を目指している。これは書学・書道史の対象としてだけでなく、美学・美術史、歴史考古学、文化史等その裨益するところは甚だ大きいと思われる。

これまで、日本や中国における印章や印人に興味を持ち、それへの史的考察や作品研究をテーマに据え論考を発表してきた。日本の印人の研究、主として高芙蓉研究、並びに彼を祖とする芙蓉派の系譜と目される、源惟良、小俣庵、福井端隠、山田寒山、山田正平等の事蹟の調査・研究と作品分析、そして印学の継承とその発展を探ることを問題としてきた^①。また、わが国の印人伝における唯一の専著と言える中井敬所の『日本印人伝』^②をさまざまな文献・資料より拾遺し補訂することを課題としている。篆刻の専家はもちろん、篆刻に関わる傍系の文人・芸術家の研究も併せて進めている。

本稿で取り上げる山田寒山（一八五六—一九一八年）^③は、名は潤子、寒山と号した。禅宗永平寺派の僧侶を務めた。元来彼は多芸多才で、詩・書・画・篆刻・陶芸すべてをよくした。詩情を醸した感興豊かな作風による篆刻家、書画家として近年とみにその名が喧伝されている。

寒山に関する文献・資料で公刊されたものはむしろ少なく、東京に住する山田家の収蔵品が大部分であろう。筆者は四十数年にわたり山田家に収蔵する資料の整理・調査にあたらせていただいた。

本稿では、山田家に所蔵される寒山関係の新聞記事の切り抜きを貼り込んだ「明治・大正期山田寒山関連新聞資料」（仮に『寒山新聞』と呼ぶ^④）などを基に年譜を編み、彼の生涯に関して論究するものである。

二 年譜を編むうえでの主たる資料・文献

山田寒山に関する詳細な伝記はまだ編まれていない^⑤。筆者が「山田寒山研究②篆刻について（下）」（『修美』第二二巻通第四二号、修美社、一九九三年四月）において、年譜を作成したのが、最も詳細なものといえる。

まず寒山の伝記を編む上での主たる資料を挙げ、若干の略解を施しておく。

1、「明治・大正期山田寒山関連新聞資料」（『寒山新聞』）

山田家に蔵する『寒山新聞』は、四十年前に、複製させて頂いた。その後数度拝借、調査・研究させて頂いたが、劣化や落丁箇所も見られ、私蔵のコピー資料が最も原型を留めているかと思われる。

同資料の採録対象紙は広範で、東京や大阪の主要紙のみならず、地方紙や外地紙に亘っている。また、同一内容記事を複数採録している。

同資料は、全てで五冊からなる。スクラップ帳は、二段もしくは三段組みの予め枠が朱色で印刷された台紙に、新聞の原紙の切抜きを貼付したものである。寒山名の記事部分に朱線が施されている。また各段に新聞名と日付が印刷もしくは手書きされている。手書きは、墨や朱書きによるもので、木村竹香^⑥と寒山本人の手になる。

- ① 第一冊 縦三〇・二×横二一・三cm、二〇〇頁
- ② 第二冊 縦二九・八×横二一・七cm、二〇〇頁
- ③ 第三冊 縦二六・〇×横三六・八cm、七四頁
- ④ 第四冊 縦二四・五×横一七・五cm、七六頁
- ⑤ 第五冊 縦二八・五×横一八・五cm、一三二頁

同『寒山新聞』の記事で伝記に関係する主たる記事は、以下の通りである。

- ⑨～⑬の記事の掲載誌等は不明である。
- ① 「中央舞台の愛知県人(四十八) 僧侶山田寒山」(『新愛知』大正三年五月)
- ② 「寒山寺の鐘声」(『満州日日新聞』明治四十年)
- ③ 「寒山和尚の懐旧談(二)」(『新愛知』明治四十年六月六日、七日、八日、九日、十日、十一日)
- ④ 「毎日譚海 山田寒山(一)」(『毎日新聞』明治三十五年三月二日、三日、四日、五日)
- ⑤ 「寒山一夕話(一)」(『北越日報』四月二二日、二三日、二四日)
- ⑥ 「山田寒山翁を訪ふ」(『海南新聞』明治四三年四月十日)
- ⑦ 「応接室、山田寒山師」(『東京毎日新聞』明治四三年四月二二日)
- ⑧ 「百人一話」(山田寒山氏の篆刻流派談(上)(中)(下))
(『東京日日新聞』(中)は、明治四十年十月二五日)
- ⑨ 「鉄琴遺韻(二)」(『九』山田寒山氏談(四月二七日、二八日、二九日、三十日、五月一日、二日、三日、四日))
- ⑩ 「鉄筆閑話(山田寒山師談話)」

⑪ 「変物画伝(二)」(伊藤公に愛せらる楽焼の寒山師)

⑫ 「寒山寺譚り」

⑬ 「榎松楼の一夕」

2、『寒山手控え帳』

山田寒山自筆墨書による手控え帳である。縦三二・〇×横一一・八cm、五三丁。内容は、年表や、漢詩、住所等多岐に亘っている。寒山の若年期の足跡が分かる。

3、山田正平執筆による記事

「山田寒山・河井荃廬」(『近代日本の教養人』実業之日本社、一九五〇年六月) 山田寒山の生涯と正平の生涯が『寒山新聞』の記事を基に記述されている。

4、水田紀久『続補日本印人伝』

中田勇次郎編『日本の篆刻』(二玄社、一九六六年十一月)の水田紀久『続補日本印人伝』は、山田寒山に関する記述がある。

名は潤子。愛知の人。長崎に小曾根乾堂を訪ね、伊勢の福井端隠に師事。大阪天満寒山寺に滞留、号を名乗る。上京。中国蘇州寒山寺住職となり、夜半の鐘の新鑄に努む。大正七年(一九一八)十二月二十六日没す。六十三。羅漢印譜あり。

5、『篆刻家略伝』

架蔵本『篆刻家略伝』は、筆者が某古書肆にて購入したものである。鹽谷長坪所有印のある岸本昌齡稿本『篆刻家略伝』である。これは北川博邦先生が「日本印人伝」(伏見冲敬編『印人傳集成』汲古書院、一九七六年十一月)で触れている。岸本昌齡による日本の印人略伝についての自筆稿本で、他に明治・大正期の篆刻に関わる記事の切り抜きが貼付されている。これには山田寒山に関する記事として、「陶画篆刻の名人山田寒山翁今朝逝く」が貼りこまれている。同資料は、中井敬所の『日本印人伝』、水田紀久先生の『続補日本印人伝』の欠の幾らかを補うことができる。

三 山田寒山年譜稿

本稿においては、山田寒山の年譜を作成する。旧稿「山田寒山研究②」篆刻について（下）（前掲）における年譜に加筆修正したものである。寒山の詳細な伝記・年譜は、後日に期したい。

凡例

- 一、本年譜の対象期間は、山田寒山が出生した年から、埋骨された年までとする。
- 一、出典は煩瑣を避けて最小限に留めた。
- 一、事蹟で年代不明であるが、略ぼ推定されうるものは、「この頃」として、その年の項目として記載した。
- 一、年齢は数え年をもって示した。
- 一、字体は原則として現行の字体を用いたが、原文書の字体を用いた場合がある。

西暦 和暦 年齢 事蹟

西暦	和暦	年齢	事蹟
一八五六	安政三	1	七月三日、愛知県愛知郡長久手村（現在の長久手町）に生まれる。父山田丈助、母貞参尼。本名潤子・菊香、不二山人、寒山と号す。齋号は芝仙堂・風火仙窟。
一八六六	慶応四	11	三月二四日、尾張国丹羽郡伝法寺村薬師寺住職大如に就て得度する（得度）。
一八六九	明治二	14	夏、尾張国愛知郡熱田新宮阪町円通寺住職羽休達関再会に首先安居（入衆）。
一八八一	明治十四	26	六月一日、紀伊国南牟婁郡二木寫浦最明寺住職虎嶽の室に入つて嗣法（伝法）（8）（9）。
一八八五	明治十八	30	夏、最明寺に於て初会修行。
一八八八	明治二一	33	五月三十日、最明寺を退職する。その後大阪府摂津国西成郡北野村四百七番屋敷法界寺内に徒弟刀彌鼎と共に閑居する。
一八八八	明治二一	33	十月六日、転居する。大阪府壹号支局へ編入届。「退職後他管に閑居に付御届」と「御所轄内へ閑居に付御届」を提出する。前者は三重県宗務支局並に曹洞宗務局宛、後者は大阪府第壹号宗務支局並に曹洞宗務局宛。
一八九一	明治二四	36	三月、木村竹香、羅漢印並に印譜製作を発願する。四月十三日、『独占話断易学指南』を発刊する。（鹿田書房発行）
一八七一	明治四	16	四月二日、明治七年二月二日、美濃国不破郡竹ヶ鼻村本覚寺住職一牛 <small>マヅ</small> に随侍する（修学）。
一八七四	明治七	19	この頃（明治五年？）長崎に赴き、篆刻家小曾根乾堂を訪問し、篆刻を学ぶ。
一八七九	明治十二	24	この頃、伊勢の印人福井端隠に入門して芙蓉派の篆刻を学ぶ。
一八八一	明治十四	26	八月二三日、紀伊国南牟婁二木寫浦最明寺へ首先住職（住職）。
一八八五	明治十八	30	九月二十日、東京能本山に就て伝衣（伝衣）。

- 一八九五 明治二八 40 晩秋、東京に移住する。三田芝公園内瓢箪池付近に住し、芝仙堂と名づける。同所にて、篆刻・書画・楽焼を再開する。
- 乙未
- この年、日下部鳴鶴の所で呉昌碩の印を見て、その風を慕う。
- 一八九六 明治二九 41 伊藤博文主催による滄浪閣落成詩会に参加し、公の知遇を得る。
- 丙申
- 一八九七 明治三〇 42 六月（秋？）日下部鳴鶴から呉昌碩の話聞く。また中林梧竹が中国へ遊学することを聞き、中国へ渡り、当時荒廢の極にあった蘇州寒山寺の住職となる。中国に約四ヶ月滞在の後、寒山寺の再建並に夜半鐘の行方探索のため帰国する。
- 丁酉
- 一九〇三 明治三六 48 新潟へ百余日にわたり客遊する。
- 一九〇四 明治三七 49 八月、木村竹香『羅漢印譜』（「瓦礫放光」一冊本）を補訂刊行する。
- 甲辰
- 一九〇五 明治三八 50 春、夜半鐘が北陸の某寺にて鑄潰された形跡を発見する。伊藤博文、寒山は、新梵鐘再建の業を発願する。（伊藤公檀中総代、寒山願主）
- 乙巳
- 四月、伊藤博文に新梵鐘の鐘名を請う。
- 四月、夜半鐘再鑄の主意書を頒布する。
- 一九〇〇 明治三三 45 春、『滄浪閣印譜』を二部作成する。
- 庚子
- 六月九日、深川鹿島私邸において園遊会餘興が催される。即席楽焼をする。
- 一九〇七 明治四〇 52 岡本椿所・五世浜邨蔵六・河井荃廬・初世中村蘭臺等と丁未印社を創立する。
- 丁未
- 第二回寒山墨竹百幅会を催す。
- 一九〇一 明治三四 46 この頃、向島小梅町へ寒山寺を移し、本窯を開く。
- 戊申
- 一九〇八 明治四一 53 一月、白山公園偕楽園に於て開龕式を挙げる。
- 三月、明治印学会規約を頒布。正会員は、五世浜邨蔵六・岡本椿所・河井荃廬・初世中村蘭臺・山田寒山である。
- 四月三日、木村竹香『羅漢印譜』（「瓦礫放光」「金石結縁」一帙二冊）を刊行する。また、行形亭において「羅漢印譜披露並書画煎茶大会」を催す。
- 一九〇二 明治三五 47 大阪・阿波・京都に遊び、京都東山一心院で、高芙蓉の墓、寿蔵碑を発見する。
- 壬寅

- 一九〇九 明治四二 54 十月二六日、伊藤博文薨去す。(六九歳)
乙酉
- 一九一〇 明治四三 55 夏、新梵鐘完成する。
庚戌 十月頃、寒山寺梵鐘の分身、甲乙丙三種の頒布を始める。
十二月二四日、小林誠義郎において、新梵鐘の撞初式を挙行する。
- 一九一一 明治四四 56 十一月二二日、芝公園増上寺において、故伊藤公辛亥 三回忌法要を兼ねて、鐘供養と撞初式を挙行する。
十一月三十日、第二回寒山墨竹百幅会を催す。
- 一九一二 明治四五 57 一月、「日本寒山寺建立化縁墨竹十万講主意書(大壬子 正元年)」を起草する。
- 一九一三 大正二 58 一月五日、富益齋の著『印章備正』を校訂刊行する。
癸丑
- 一九一四 大正三 59 六月末、新梵鐘を神戸港から上海蘇州寒山寺へ送る。
甲寅 寒山屏風百双会を開く。
- 一九一五 大正四 60 三月二日、千葉県海上郡野尻村字長山の地において、乙卯 日本寒山寺建立地鎮祭を修する。
日本寒山寺建立結縁墨竹十万講のため、新潟各地へ巡遊する。
- 一九一六 大正五 61 五月、寒山墨竹画会を開く。
丙辰

一九一八 大正七 63 一月十五日、伊豆長岡温泉の遊園地に寒山寺別院を建立する計画を企てる。
戊午

十二月二六日午前七時、下谷区下谷町一丁目一番地の寓居にて没する。今春来、痔ろうに罹り療養中であつた。

一九一九 大正八 己未 一月一八日、本葬が、浅草松葉町の海禪寺において執行される。導師は宗演老大師、副導師は中原秀岳師が勤める。会葬者は、細川侯、杉子、末松子等を始め文人画家、工芸家、仏教法無慮五〇〇余名に達した。

鎌倉円覚寺大本山佛光国師塔下の骨清窟、紀州最明寺に埋骨。

四 結

本稿で取上げた明治の篆刻家山田寒山は、性来多芸多能で多方面にわたって活躍をした。詩・書・画・篆刻・陶芸すべてを善くした。また豊富な逸話を残し、明治の元勳伊藤博文との交渉は有名である。篆刻は小曾根乾堂、福井端隠等に学んだとされ、芙蓉派の系譜に連なる。刻風は端隠の師小俣螭庵に最も近い。『螭庵印譜』(一帙二冊本)に寒山刻印と類似する印が見られる。また彼の業績の中で、印学の啓蒙は重要である。『印章備正』の校訂刊行において、斯学の発展に寄与したことは評価できる¹⁰⁾。

本稿では、山田寒山の生涯を、旧稿に新知見を加え年譜稿として編むとともに、新資料を提示し、寒山の研究の一端を明らかにした。伝記は今後も更に基礎資料の蒐集・整理を進めるとともに、実証的な考察を加えてゆきたい。本稿執筆に際し、山田家、最明寺(榎本幾穂師)、龍淵寺(伊藤正見師)から多大なるご高配を賜った。心から感謝申し上げる。



图2 龍淵寺



图3 最明寺



图4 最明寺藏印章